

指示詞コノ・ソノの予測裏切り性

—ハ・ガとの関係から—

堀内 萌

1. 問題の所在

日本語の指示詞研究において、コ系指示詞・ソ系指示詞・ア系指示詞の選択がどのように行われているかについての議論が多くなされている。現場指示用法においては、話者と指示対象の距離によってその使い分けがなされているという論が一般的である。またコ系指示詞・ア系指示詞は文脈指示においても現場指示の性質が保持されており、「話し手から（物理的・心理的に）近いものをコ系指示詞、遠いものをア系指示詞」で示すという指示詞の選択の原理が働いている。一方、ソ系指示詞では現場指示の性質は弱く、コ系指示詞・ア系指示詞とソ系指示詞とでは性質が大きく異なるとされている。

庵(2007)は、ソ系指示詞の持つ用法の1つとして、「予測裏切り」をあげている。「予測裏切り」とは、先行文脈から予測されることと対立する内容を述べることである。

- (1) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。その/*この/*φ順子が
今は他の男の子供を2人も産んでいる。(庵 2007)

(1) のような文脈では、先行詞「順子」が固有名詞であるのにもかかわらず、裸で使用できない。ソノのみが使用可能であり、コノは使用できない。庵(2007)は、指示詞コノ・ソノの選択の際に、テキスト的意味の付与が義務的であるときにはソノの使用が義務的であると説明している。つまり(1)では2回目に登場する「順子」に「あなたなしでは生きられない」と言っていた順子」というテキスト的意味を付与しており、そこから予測される事態を次の文で「裏切る」こととなる。

しかしこのような予測裏切り性は本当にソ系指示詞のみの用法であるのか。(2) のようにコ系指示詞が許容される例も存在する。

- (2) 古代エジプト最大の都市として、常に国の中心として栄えてきたワセト。この/その/??φワセトが、その繁栄とは無関係に、都でなくなったのは、もうかなり前のことになる。(河原よしえ『ファラオを盗め』)

本稿では、「ソノ+N+ガ」でも予測裏切り性がない場合があり、「コノ+N+ガ」でも予測裏切り性を持つ場合があるという現象を提示し、ソ系指示詞の持つ「予測裏切り」

には「ガ」の性質が大きく関わっていると考え、指示詞と「ハ」「ガ」の関係から「指示詞+N+ガ」のもつ予測裏切り性を再検討し、庵(2007)の指摘するソ系指示詞の予測裏切り性は指示詞のみの持つ性質ではなく、「指示詞+ガ」によって与えられることを主張したい。

2. 「予測裏切り」とは何か

庵(2007)の指摘する「予測裏切りの意味の付与」は、ソ系指示詞のみの用法なのか検証していきたい。まず庵(2007)はソ系指示詞とコ系指示詞の選択に関して以下のような説明を与えている。

- (3) 「この」はテキスト送信者が先行詞をテキストのトピックとの関係性という観点からとらえていることを示すマーカーである
「その」はテキスト送信者が先行詞を定情報名詞句へのテキストの意味の付与という観点からとらえていることを示すマーカーである

また、ソ系指示詞由来である接続詞「ソレガ」の意味的特性を「予測裏切りの関係」を表示する接続詞であると規定している。「予測裏切り」とは、1. でも述べたとおり、先行文脈から予測されることと対立する内容を述べるということであり、接続詞「ソレガ」にはそれ以降に対比／逆説的な文脈が続くことを先触れする機能があると考えられる。

- (4) a 冷戦時代は、キューバからの亡命者は自由の戦士ともてはやされ、米国の市民権を与えられた。b それが、いまはすっかり邪魔者扱いである。
(週刊朝日 1994.9.23) (庵 2007)

(4) では a 文を読んだ段階でテキスト受信者は「キューバからの亡命者は厚遇されている」という予測を立てるが、この予測は b 文で裏切られることとなる。接続詞「ソレガ」は文頭で「予測が裏切られる」ことを先触れしている。

さらに庵(2007)は「ソレガ」と「ソノNガ」型との関係に、テキストの構造の類似性を指摘している。(5) はソノNガ型を用いた文であるが、(6) のように「ソノNガ」を「ソレガ」に置き換えることが出来る。

- (5) 小島さんにいわせると、わらべ歌や民謡は、日本人にとって最も自然な音楽表現ということになる。そのわらべ歌や民謡が(/??)は、田植え歌、舟歌、木やり歌、神楽、祭ばやしなどとともに、このところ急速に消えつつある。
(天声人語 1986.12.5) (庵 2007)

- (6) 小島さんにいわせると、わらべ歌や民謡は、日本人にとって最も自然な音楽表現ということになる。それが、田植え歌、舟歌、木やり歌、神楽、祭ばやしなどととも、このところ急速に消えつつある。

庵 (2007) は、接続詞「ソレガ」では「ソレ」の部分が先行する文脈からの義務的なテキストの意味の付与を行っており、そのことによって予測裏切り性が生じていることを指摘している。(7) は庵 (2007) による「ソレガ/ソノNPガ」の使用される文の構造である。「ソレガ/ソノNPガ」の機能は文の構造において、先行文脈 (S1) において喚起される予測が「ソレガ/ソノNPガ」に続く部分 (S2) で裏切られることをテキスト受信者に先触れすることにあると指摘している。

- (7) S1. それが/そのNPが, S2. (庵 2007)

このようなソノや接続詞「ソレガ」の持つ「予測裏切り」は、構文環境¹に依存することが指摘されている。

3. 予測裏切り性の検証

2 節では庵 (2007) の提示するソ系指示詞の持つ予測裏切り性の付与の性質について説明したが、3 節ではその性質がソ系指示詞のみのものであるかを検証していく。

3. 1 「ソ系指示詞+ガ」は本当に予測裏切り性を持つか

まずは、「ソノ+N+ガ」には必ず予測裏切り性が現れるかを検証したい。庵 (2007) の主張と異なり、予測裏切りが生じない場合があると考えられる。

- (8) 五十男は周囲を見回した。見回した目に妻の八重の姿が映った。八重だけではない。百治の女房のハナもいるし、牛蔵のかかあのかもいる。ほかにもいっぱいいる。アメリカ講を世話してくれた魚津の留吉もいる。その留吉が傘を高くかざして前に出て、「一万両は持ってかえたか」と、そこら中に響く声でいった。顔は笑っている。 (西村望『海の凧』)

- (9) そこでプロデューサーのクリード・テイラーはちょっとした仕掛けをします。前述の五分十五秒間の長いヴァージョンの「イパネマの娘」のジョアン・ヴォーカル部分を切り捨て、アストラッドのヴォーカル部分が中心の三分十五秒のヴァージョンを作り、シングルとして発表します。そして、そのアストラッドが歌う「イパネマの娘」のシングルは二百万枚の大ヒットとなり、アルバムもチャートを上り、多くのグラミー賞を獲りました。

(林伸次『ボサノヴァ』)

(8) では予測裏切り性は付与されておらず、(9) では順接の接続詞「そして」によって文が結束しているため、予測裏切り性があるとは言にくい。このことから、「ソノ+名詞+ガ」が使用されるすべての用例に予測裏切り性が現れるわけではないことが分かる。庵(2007)ではソ系指示詞に予測裏切り性が付与されることを指摘しているが、これはソ系指示詞が使用される文脈で必ず現れる現象ではない。以上の観察から、「ソノ+N+ガ」によって予測裏切り性が付与されるという機能は、指示詞によるものではなく、指示詞「ソノ」の機能+「ガ」の機能によって生じる可能性が考えられる。

3. 2 指示詞の持つ予測裏切り性

一方、コ系指示詞+N+ガの用法には予測裏切り性が与えられないのかを見ていく。

(10) ソノ+N+ガ

ザカリアンはロベルトの介助を嫌い、最近ではどんな用事でもマリアが呼び出されるらしい。しかしドアを開けるのはいつもロベルトで、そのロベルトが出てこない。一時間前には確かにキャビンにいたし、深夜の二時に外出するとは考え難い。
(笹本稔平『太平洋の薔薇』)

(11) ソノ+N+ハ

ゲーテは今日にいたるまで彼を理解した唯一の人であったかもしれぬ。そのゲーテはモーツァルトに関してエッカーマンに一日次のように語った。
(吉田秀和『モーツァルト』)

(12) コノ+N+ガ

ヒュームも啓蒙思想家の内に数えられるが、歴史家でもあるため、認識は性悪説かと想わせるほど現実的である。a このヒュームがスミスに多大な影響を及ぼし、スミスが彼に遺稿を託したこともあるということは周知であろうが、b このヒュームが教会から無神論者と謗られて教授職を得られなかったことも、当時の思想状況として注目しておいて良い。
(馬場宏二『マルクス経済学の活き方』)

(13) コノ+N+ハ

ある時、このふたりの兄弟のところへひじょうに美しい女があらわれた。パンドラという名だった。パンドラというのは、神々の贈りものすべて、という意味だ。このパンドラはなんだか奇妙な箱を手を持っていた。
(キングスレイ/阿部知二訳『水の子』)

(10)では予測裏切りの意味が付与されており、これは庵(2007)の指摘の通りである。

指示詞の後に「ハ」をとる(11)(13)には予測裏切りの意味は与えられない。(12a)では予測裏切りの意味は与えられないが、(12b)には予測裏切りの意味が与えられている。これは「～であろうが」で補足されているため、予測裏切りの意味が与えられた文脈となっていると考えられる。ここではコ系指示詞であっても「ガ」の場合には、予測裏切りの解釈が与えられることに着目したい。

以上の観察から、庵(2007)の指摘するソ系指示詞の予測裏切りの意味の付与という性質は、ソ系指示詞の持つものではなく「ガ」によって付与される性質であると考えられる。ソ系指示詞と組み合わせて「ガ」が存在することが大切であり、「ガ」と文脈によってコ系指示詞にも予測裏切り性が与えられるが、ソ系指示詞と比べると文脈の助けがないと難しいと推察される。

4. 指示詞とハ・ガ

3節では、「指示詞+ガ」の形式に予測裏切り性を付与する性質があることを示唆したが、庵(2007)でも「コノ」は「ハ」と「ソノ」は「ガ」と結びつきやすい傾向があることを示している。以下の例文の判定は庵(2007)のものに従う。

- (14) a. 昔々あるところにおじいさんがいました。
b. ある日このおじいさん {は/??が} /そのおじいさん {??は/??が} 山へ芝刈りに行きました。(改行筆者)
- (15) a. 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。b その順子 {が/??は} /この順子 {??が/#は} 今は他の男の子供を2人も産んでいる。

(14)においてb文は、a文において先行詞で導入されている「おじいさん」の行動を叙述しているのみとなっているのに対して、(15)では、a文からのみの情報で立てた予想がb文で裏切られる。このことから、庵(2007)は以下のようにまとめている。

- (16) a. 「この一は」型は先行文脈の叙述内容を継続／発展させる意味内容を表す文で用いられる。
b. 「その一が」型は先行文脈の叙述内容と対立する意味内容を表す文で用いられる。

庵(2007)ではコノとハ、ソノとガの関係のみに焦点をあて説明をしているが、予測裏切りの意味の付与は「ガ」の持つ性質にも大きく影響を与えていると考えるため、以下では「ハ」と「ガ」それぞれの性質について見ていきたい。

4. 1 「ハ」と「ガ」の性質

「指示詞+N+ガ」の用法を見ていくために、まず「ハ」と「ガ」の性質について見ていきたい。「ハ」と「ガ」の選択には「旧情報」と「新情報」という観点で説明が与えられることが多い。

(17) 昔あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。ある日、おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

(17) では聞き手にとって新情報である最初の「おじいさんとおばあさん」に対しては「ガ」が用いられる。一方、「おじいさんとおばあさんがいる」という共通の了解が話し手と聞き手の間に存在するため、旧情報である2回目に言及される「おじいさん」「おばあさん」には「ハ」が用いられる。しかしこのような新情報・旧情報だけでは説明がつかない場合もある。

4. 2. 1 上林 (1989) (1998)

上林 (1989) (1998) では旧情報・新情報という概念が明確にされていない点を指摘している。従来の説明では旧情報とは「聞き手がすでに知っている（と話し手が想定している）情報」であり、新情報とは「聞き手がまだ知らない（と話し手が想定している）情報」と言い換えられ、聞き手の既知は指示対象が同定可能かどうかによるとされている。

(18) きみが責任者だ

しかし、(18) のような文において、「きみ」が聞き手にとって同定不可能な要素ではないため、同定可能か不可能かによって旧情報・新情報に分類することは難しい。

(19) 太郎と花子と夏子のうちで、誰が一番背が高いか。

太郎が一番背が高い。 (上林 1989)

また上林 (1989) では (19) が示すように、旧情報を「聞き手の意識に上っている要素」新情報を「聞き手の意識に上っていない要素」とする定義であっても正確ではないとし、「文の焦点に対する前提をあらわす命題こそ旧情報であり、その焦点を既知あるいは未知の要素と等号で結んできた命題が新情報である (西山 (1979))」という仮説を支持し、談話における既出か否かだけでは判断できないとしている。

ここで「ガ」と予測裏切り性の関係について見ていくと、

(20) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。その順子が今は他

の男の子供を2人も産んでいる。

(1) 再掲

(20) では「その順子」と「他の男の子供を2人も産んでいる」という（この場合は未知の）要素とを結びつける命題が新情報であるが、「順子」はソ系指示詞によって「あなたなしでは生きられない」と言っていた」というテキスト的意味が付与されているため、予測裏切り性が付与されると考える。「ガ」によって新情報が与えられているわけではなく、文全体が新情報となっている。

(20) においては、「その順子が他の男を2人も産んでいる」では「ガ」によって新たに情報が付け加えられているが、「ソノ」を使用し、固有名詞「順子」を繰り返すことで、二つの情報の矛盾が生じ、それが「予測裏切り性」となっている。

4. 2. 2 メイナード (1997) (2004)

メイナード (1997) (2004) では、「ハ」の物語における機能に説明を与えるためにステージングの概念を分析に導入している。

(21) テーマ（注：ここではトピックと同義）とは句または命題（proposition）の形で表現される枠組みで、その枠組みに情報が関係付けられるもの、またはその枠組み内に命題が当てはまるものの場合を言う。FSP²の原則にのっとり旧情報から新情報へという情報の流れを提示することにより、談話にテーマを軸とする結束性を与えるものである。（メイナード 2004）

メイナードの言う「ハ」のステージング機能とは、「物語の登場人物のうち、トピック化された者と非トピック化された者との描写の違い（登場人物の誰を中心に、また誰の視点から物語が展開していくのかを伝える操作の違い）を明らかにするのに有効」であるとして「ハ」はトピック化を、「ガ」は非トピック化の機能があるとしている。

ステージングでトピック化された登場人物は継続してステージ上にいて話の展開の主軸となるが、トピック化されていない登場人物は脇役として必要に応じてステージに登場するとしている。

トピック化された登場人物は古い情報であることが多いが、全ての古い情報の登場人物が自動的にトピック化されるわけではない。古い情報でもあえてトピック化する必要が無ければ非トピック化され、それに必要な助詞が選択される。トピック化された登場人物は物語のステージに残り話の展開の軸となり続ける。

メイナードでは「ガ」への言及はさほどないが「ガ」が使われた登場人物の事件は、そのまま眼前で今起こりつつある現象のように描写することになる。このため「ガ」で登場人物の行動が表現された場合は、生き生きとしたドラマチックな効果が得られる」としている。ここで「ガ」はドラマチックな効果をもたらすことから、「ガ」によって先行する文では与えられていない情報の付加がなされていると考えられる。

以上「ハ」「ガ」の役割についての先行研究を見る限り、庵(2007)による「ソ系指示詞の予測裏切り性」への再検討が必要である。「ガ」の持つ新情報が上林(1988)(1989)で説明のあるように未知の要素との統合であるならば、前提とされる情報に新たに付加されることから、「ソノNガ」が予測裏切り性をもたらず効果を持つと考えるほうが妥当である。

4. 2. 3 砂川(2005)

砂川(2005)では、コピュラ文「～は～だ」と「～が～だ」を談話内の主題の導入の観点から説明を与えている。砂川(2005)は、「ある談話の中で用いられた文が、ある指示対象について何かを叙述するという述べ方になっているときに、その指示対象を「文の主題」と呼ぶ」として談話主題の階層性と同一指示後の連鎖を観察している。

コピュラ文「～は～だ」「～が～だ」に着目し、同定文の場合、主語名詞句が焦点となる「～が～だ」文と、述語名詞句が焦点となる「～は～だ」文の2種類を区別することが出来るとしている。ここでの「焦点」とは文の中で最も情報価値の高い部分である。後項焦点文「～は～だ」は文の主題がハによって明示されているのに対し、前項焦点文または全体焦点文の「～が～だ」は文の主題が明示的な形で示されないことを指摘している。

後項焦点文「～は～が」は、新しい主題の導入するコピュラ文である。

- (22) ことばの意味を一応分かったものとして、はっきりと取り扱わなくてはならない宿命を担った分野が古くから存在していた。それは辞典である。/辞典の重要な役目の一つは【以下、辞典についての記述が続く】

(鈴木孝夫『ことばと文化』p.85)(砂川 2005)

(22)のように、聞き手が予測し得ると考えられる情報を前項「～は」で示し、後項「～だ」で予測し得ない新しい情報を導入する。このようにして導入された情報がそれ以降の談話主題として引き継がれていく。

一方、前項焦点文「～が～だ」では、前項「～が」によって導入された指示対象は、(23)のように後続談話の主題として語り継がれることが少なくない。

- (23) 今の若い人は、旅に行ってモノに出会おうとするけれど、ぼくはヒトに会うのが旅だと思っている。だから僕は旅の数だけ日本中、世界中に友達がいます。いい酒があればいいヒトに出会う、これは万国共通ですね。

(『文藝春秋』93年1月号)(砂川 2005)

後項焦点文「～は～だ」と前項焦点文「～が～だ」の新しい主題の導入という機能に関して、どちらも似通った談話環境で同様の機能を果たし得るが、聞き手にとって負担

の少ない無標の方式を使うか、負担の大きい有標の方式を使うかという違いによるものである。

砂川（2005）は後項焦点文「～は～だ」と前項焦点文・全体焦点文「～が～だ」について以下のようにまとめている。

(24) a. 後項焦点文「～は～だ」

前項を踏まえて新しい情報を提示することから、談話の主題を導入する機能を果たすことが多い。しかし典型をはずれた用い方がなされる場合には、状況的枠組みの提示や談話の結びの機能を果たすなど、談話主題の導入以外の用途で用いられることも少なくない。

b. 前項焦点文「～が～だ」

聞き手の負担が大きい「焦点→前提」という語順をとることによって、焦点情報を強調することから、談話主題の導入や対比的情報の提示や談話の結びの機能を果たす。

c. 全体焦点文「～が～だ」

状況陰題の存在によって叙述部に対する聞き手の関心を高め、さらに前項「～が」で得立的な記述を行うことから、後項「～だ」に提示する情報を強く印象付け、そうすることで談話主題の導入、古びた主題の再活性化、および談話の結びの機能を果たす。

5. 指示詞+N+ガ/ハ

庵（2007）は、「その順子が他の男の子供を2人も生んでいる」のような固有名詞に係る指示詞を用いて予測裏切り性について考察している。本稿でも、指示物が明確に同定されている固有名詞を用い、「指示詞+N+ガ/ハ」の用法について見ていきたい。

5. 1. 2 指示詞+人称代名詞+ガ/ハ

続いて、「指示詞+人称代名詞+ガ/ハ」の用法を見ていきたい。まず予測裏切り的意味が付与されている文脈ではどうであるか。

- (25) a. 彼は家から出るのも嫌이었다。その彼が世界を旅してみたいと思った。
b. *彼は家から出るのも嫌이었다。その彼は世界を旅してみたいと思った。

- (26) a. *彼は旅行好きで知られている。その彼が高校生の頃からバックパック

で世界を旅している。

- b *彼は旅行好きで知られている。その彼は高校生の頃からバックパックで世界を旅している。

(27) a ?彼は家から出るのも嫌いだった。この彼が世界を旅してみたいと思った。

- b 彼は家から出るのも嫌いだった。この彼は世界を旅してみたいと思った。

(28) a *彼は旅行好きで知られている。この彼が高校生の頃からバックパックで世界を旅している。

- b ?彼は旅行好きで知られている。この彼は高校生の頃からバックパックで世界を旅している。

「ソノ+N+ガ」は(25a)では庵(2007)の指摘の通り予測裏切り性が与えられているが、(26a)のように後続する文に予測裏切りの意味が付与されないと非文となる。また(25b)(26b)のように「ソノ+N+ハ」は後続する文に予測裏切りの意味が付与されている/いないにかかわらず非文である。一方後続する文に予測裏切り性がある場合、「コノ+N+ガ」では(27a)のように先行する文に指示対象が現れていると不自然となるが、(27b)のように「コノ+N+ハ」では許容度が上がる。(28)のように後続する文に予測裏切り性がない場合はどちらも自然とはいえないが、(28b)のように「コノ+N+ハ」の方がやや自然度が上がる。

5. 2 連体修飾文内の指示詞

続いて、連体修飾文の場合を見ていく。

(29) a 家から出るのも嫌いだったこの彼が世界を旅してみたいと思った。

- b 家から出るのも嫌いだったこの彼は世界を旅してみたいと思った。

(30) a *旅行好きで知られているこの彼が高校生の頃からバックパックで世界を旅している。

- b 旅行好きで知られているこの彼は高校生の頃からバックパックで世界を旅している。

(31) a *家から出るのも嫌いだったその彼が世界を旅してみたいと思った。

- b *家から出るのも嫌いだったその彼は世界を旅してみたいと思った。

(32) a *旅行好きで知られているその彼が高校生の頃からバックパックで世界を旅している。

b ??旅行好きで知られているその彼は高校生の頃からバックパックで世界を旅している。

(29) (30)のように「コノ+N+ガ/ハ」は連体修飾文の方が自然であるのに対し、(31) (32)では、「ソノ+N+ガ/ハ」が連体修飾文に現れにくいことが分かる。しかし連体修飾文内に現れるコ系指示詞であっても(30a)のように「ガ」を伴うと使用できない。また「ソノ+N+ガ」であっても(32b)のような連体修飾文ではやや許容度が上がる。しかし

(32) b' 彼は旅行雑誌でコラムを連載している。旅行好きで知られているその彼は高校生の頃からバックパックで世界を旅していた。

とすると自然な文になるため、やはりソ系指示詞を使用する場合には先行する文中に指示対象が現れていなければならない。庵(2007)では、予測裏切りの意味の付与に関し、前文でテキストの意味が与えられている場合に限り論じていたが、(29)～(32)のように連体修飾で文脈が与えられる場合にはコ系指示詞しか使えず、また予測裏切りがある場合は「が」しか使えないと言える。

連体修飾文内であれば、予測裏切り性のある文脈内であっても「コノ」が使用可能であることが観察できる。これは、ソ系指示詞の基本的用法は文脈指示であるため、言語文脈に依存し文中で言及された事物でなければ指示できないのに対し、コ系指示詞は現場指示用法を基本とし、言語文脈に依存しないためと考える。そして、指示詞「コノ」が予測裏切りの意味を与えているのではなく「ガ」によって予測裏切りの意味が付与されているのである。

6. まとめと今後の課題

庵(2007)は「ソノ+N+ガ」の持つ予測裏切り性を指摘しているが、「ソノ+N+ガ」が使用されるセンテンスであっても予測裏切り性が付与されない場合、また「コノ+N+ガ」でも予測裏切り性が付与される場合も存在し、「指示詞+Nが」の形に予測裏切り性があると考えられる。そもそもこれは指示詞による性質ではなく、「ガ」の持つ機能に起因する。しかし「ソノ+N+ガ」が予測裏切りの意味を持つように見られるのは、「ソノ」と「ガ」が結びつきやすいためである。指示詞と「ガ」の両方によってもたらされる機能である。

本稿ではソノ・コノを中心に予測裏切り性を検証したが、ア系指示詞でもソ系指示詞・コ系指示詞と同様に「ガ」によって予測裏切りの意味の付与の役割を持つことがあると考えられるが、詳しい考察は今後の課題としたい。

- (25) 謝罪しているにしては高飛車だし、ほんの会釈程度だが、あの克也が頭を下げるなんてー！ 何も言えずに硬直していると、パタパタとスリッパの音が近づいてきた。

(瀬川貴次『紅蓮の御霊姫』)

【注】

1. 庵 (2007) は構文環境を「①先行詞の捉え方として有標なものである「ソノ」の使用が義務的②定情報名詞句のマーカーとして有標なものである「ガ」でマークされている」と説明している。
2. FSP (Functional Sentence Perspective) : 発話としての言語のコミュニケーション上の体系を説明するための法則。文を抽象的なものではなく発話として捉え、情報の出発点、つまりテーマ (theme) と、情報の中心 (rheme) の二要素に分け、この法則に従ってテーマからレーマへと進行する。

【参考文献】

- 庵功雄 (2007) 『日本語におけるテキストの結束性の研究』、くろしお出版
- 上林洋二 (1988) 「指定文と指定文—ハとガの一面—」、『文藝言語研究 言語篇』14、筑波大学
- 上林洋二 (1998) 「「新から旧への原則」と指定」、『文学部紀要』12、文教大学
- 金水敏・田窪行則 (1992) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」、金水敏・田窪行則編、『日本語研究資料集 指示詞』、pp123-149、ひつじ書房
- 砂川有里子 (2005) 『文法と談話の接点 日本語の談話における主題展開機能の研究』、くろしお出版
- 西山佑司 (1979) 「新情報・旧情報という概念について」、『研究報告・日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』、国際基督教大学
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』、くろしお出版
- メイナード・K・泉子 (1997) 『談話分析の可能性 論理・方法・日本語の表現性』、くろしお出版
- メイナード・K・泉子 (2004) 『談話言語学 日本語のディスコースを想像する構成・レトリック・ストラテジーの研究』、くろしお出版
- 吉本啓 (1992) 「日本語の指示詞コソアの体系」、金水敏・田窪行則編、『日本語研究資料集 指示詞』、pp105-122、ひつじ書房

【用例出典】

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」国立国語研究所 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp>)

(ほりうち もえ 筑波大学)